

## 亡弟堀岡正定の十五年

堀 岡 正 義

亡弟堀岡正定の思い出を 2002 年の同期会の会報に書いたところ、何人かの方から思い出話しや写真を送っていただき、弟が生れ返ってきたような感動に浸りました。来年 2005 年には皆様とともに傘寿を迎えることになります。そこで堀岡正定十五年の生涯をまとめてみました。

堀岡正定、大正 14 年 11 月 18 日、巢鴨宮仲（現豊島区）で誕生、2 歳下の弟である。3 歳の時、大井町に転居、母の実家が仙台坂近くの林町にあったのが縁のようだ。倉田、鹿島、山中、森前と半年毎に転居、奈良に住んでいた父の両親を迎えるための家を探していたためらしい。

林町の母の実家利根川家にはよく遊びに行った。洋風 2 階建ての立派な家で、美しい芝生の庭があった。写真はそこで撮ったものである。家から 30 分以上もかかったので、帰りにはよく人力車を利用した。乗るのが嬉しかった。

日本光学前の森前の家は、家は古いが 2 階建てで広く、庭には築山もあり、同級生がよく遊びに来た。昭和 19 年強制疎開で西小山に引っ越すまで十数年間を過ごした懐かしい住まいである。

父の名前が正家なので、息子には正義、正定と名付けた。“正定”とは呼びにくいので、“定ちゃん”の愛称で呼ばれることが多かった。

昭和 7 年大井第一小学校に入学、入学生が多かったので、月組という男女組を作り、そこに入った。素直で頭がよく、先生や同級生に信頼されたようである。女子の谷田郁さんとともに、級長、副級長をつとめた。

当時のことを思いだしながら、自宅から学校へ行く地図を作ってみた。滝王子の交番を左折して行ったようである。

祖父の治三郎は書家としても仲々の腕前で、我々兄弟に習字を教えてくれた。大井第一小学校創立 60 周年記念の同窓会誌に当時 4 年生の正定の習字が載っているが仲々の出来栄である。

母方の祖父利根川守三郎は鎌倉に別荘を持っていた。江の電の長谷駅に近く、由比ヶ浜海水浴場に 5 分の好位置、毎年数日間海水浴におじゃました。上記の同窓会誌に正定君がそのことを書いている。海岸では海水とたわむれる程度で、水泳は上達しなかった。丸の内に勤めに出ていた祖父が、帰りに丸ビルの富士アイスでチョコレートを巻いたアイスクリーム“スマック”を買ってきて、おいしく食べたことを思い出す。

谷田家のとなりの代田さんのお父さんは、銀座教文館 1 階富士アイスの店長で、3 人のお子さんの長男春水君は私と大井小で同期、府立一中にもいっしょに入った。

夏休みの宿題に、正定君は家でもらった“たかあしがに”を標本にして提出したところ、担任の柳沼先生が大へん喜んで、教室に飾り、その前で一緒に写真を撮って下さった。通りかかった谷田郁さんもしょに写ったと聞いている。

その頃私たち兄弟は野球に夢中になっていた。父にグラブを買ってもらい、庭でキャッチボー

ルをしているうち、祖父が大事に育てていた朝顔の鉢を割ってしまい、青くなったことを覚えている。

5年生になって組替えがあり、正定君は竹組に編入となった。ここでも評価は高かったようである。関西修学旅行、卒業記念の写真が残っている。塾に行ったり、家庭教師に来てもらったりはしなかったが、1人で勉強し、昭和13年府立一中に合格した。銀座に出て、うな井を食べて合格を祝った。

新しい赤いかばんの正定君の晴れやかな姿が今でも眼に焼き付いている。

同じく府立一中に合格したのは(松)国司直彦、(竹)石坂雅彦、(月)小笠原平一郎、島津 浩、高田洋一郎、八城邦基の諸君だったと聞いている。

しかしながら楽しくいっしょに通えたのは最初の2〜3ヶ月、正定君は夏前から体調を崩し、2学期から登校不能となった。東大病院で診察してもらったところ、脳水腫、不治の難病である(現在ならば治療可能)。何とか治療との想いで、内科の特別室に半年ほど入院させた。当時通信省(現在のNTT)研究所の技師だった父にとり、経済的負担は大へんだったと思う。退院後は自宅で家族総出で看護に努めたが、その甲斐もなく、昭和15年12月23日帰らぬ人となった。使つて間もない府立一中の赤いカバンだけが家に残った。

後日大井小学校で担任の吉田貞之助先生と学友数名の方が弔問に来て下さった。ありがたいことである。

東本願寺和田堀廟所(京王線明大前)の墓に眠っている(戒名 慈岳院釈正定童子)。

大井小学校同期会皆様のお元気な様子を見るにつけ、もし正定君が健康に成長してくれていれば、どんなに社会に貢献し、小生の力になってくれただろうと残念でならない。

弟の死亡時、中学5年だった私の受験戦争は厳しかった。正月からは殆ど学校へ行かず、研究社の受験講座をたよりに勉強した。その甲斐があつて、3月には水戸高等学校に合格した。

明るい話題をひとつ。弟が世を去り、私が水戸へ行き、淋しくなった我が家では両親の励みで、昭和18年2月妹の和子が誕生した。母静子42歳の高齢出産である。私と19歳も離れている和子も昨2003年には還暦を迎えた。今ではよく世話をしてくれる相談相手である。

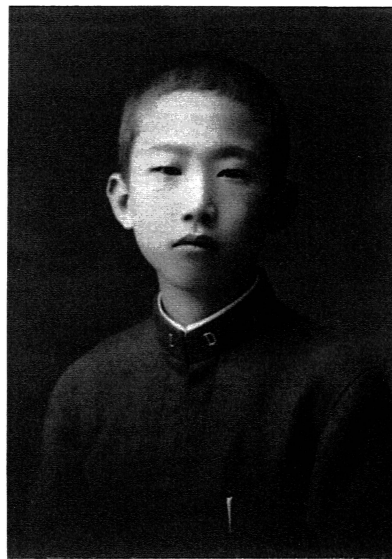
正定君の遺品に、小学校の卒業写真、工作で作ったと思われる銅板に堀岡正定と刻んだ標札、府立一中の生徒手帳がある。いずれも和子に引き継ぐことにしている。

同期会とのつながりにより、正定君のことについて多くを知ることができ、彼が15年の短い生涯を立派に全うしたことを誇りに思っている。

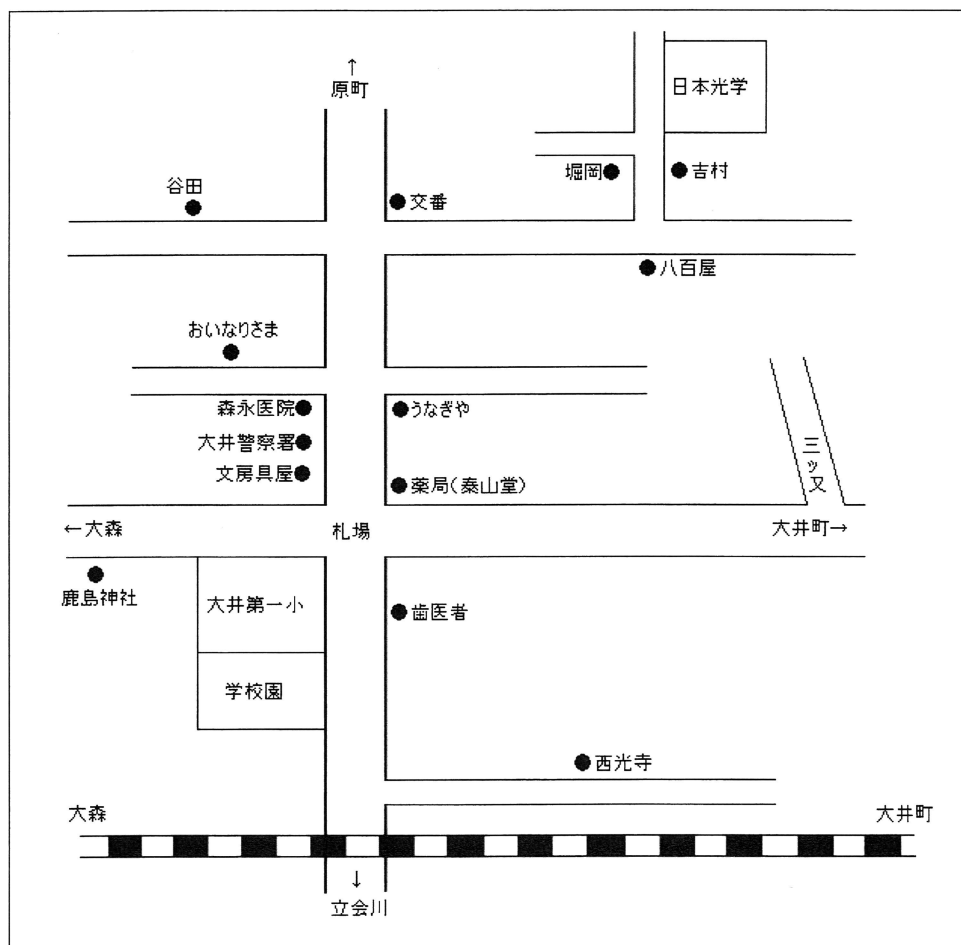
本稿の作成にあたり、石坂雅彦、堀 郁子両氏のご協力を感謝します。



●幼児の筆者兄弟 正義(5歳, 左) 正定(3歳)



●府立一中入学時



## 正定君の思い出

石坂 雅彦

昭和 13 年春、正定君とともに大井第一小学校から府立一中に入学した。正定君は理数系のお利巧さんだった。足し算、引き算、掛け算がよく出来ただけでなく、数を「かたまり」で「イメージ」でつかんでいた。学校前の全甲堂(文房具店)でノートを買う。石「ノート 1 冊 24 銭、4 冊買おう」堀「96 銭だ」石「計算速いな」堀「50 が 2 つで 100、25 が 4 つで 100、125 が 8 つで 1000 だ。24 が 4 つなら 96 だよ。」

われわれ竹組の 5 年、6 年の受持ちは吉田 貞之助先生だった。先生は「国史」がお得意で、生徒はその授業が大好きだった。授業は英雄話の「講談」だった。源平の合戦、楠木正成と足利尊氏、織田と豊臣の天下統一に皆、固唾をのんだ。正定君の関心は少し違っていたように思う。彼の頭の中には 2 次元の地図と縦軸の歴史年表がいつもあり、歴史を 3 次元的に把握していたように思われる。「平家は朝廷の公家と仲が良かった。源氏は公家と仲が悪かった。当時、全国各地で公家の荘園は広大だった。領土を広げたい地元の有力武家は源氏を守り立てて幕府をつくらせた。」この堀岡史観は今も印象に残っている。

正定君は若死にしなければ、おそらく物理か化学の分野で「ノーベル賞」を受賞していたことだろう。70 歳代まで生きていたら「証拠を見せろ」で「考古学」「古代史」にのめりこんでいたことだろう。

ちなみにノーベル賞の利根川 進氏は、利根川守三郎の次男利根川 勉氏の息子で、正定君とは従弟である。

ご冥福を祈る。